
白紙の地図と高校生のPGC ~ half red eyes ~

白凧 黝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白紙の地図と高校生のPGC \ half red eyes \

【Nコード】

N7675Y

【作者名】

白凧 黝

【あらすじ】

2055年。

世界の地図は白紙に帰った。

終わりの見えない不況が、第3次世界大戦を引き起こしたのである。連合も同盟も無い己の利権のみを求めた2050年から約5年にも及んだ大戦は、世界各国と国境を消し去った。

終戦から約20年後の2075年。

第4都市と言う名に変わった日本ーの極々一部は、先の大戦で

権力を握ったPMC（民間軍事会社）に因って、統治されつつあった。

だが、PMCが権力を握る前。崩壊していたかつての日本の治安を守っていたのは、PMCと同時期に設立された、PGC（民間警備会社）だった。

これは、かつての日本のとある街――半径十キロの世界の中で様々な思いを抱くPGCの少年少女達の物語。

プロローグ1（前書き）

初めまして。

白風 黝と申します。

このような形で、小説を掲載するのは、初めてで、駄文かも知れませんが、生暖かい（？）目で見守って頂けたら幸いです。

尚、私は学生ですので、考査などで更新が遅れる場合がございますが、ご了承下さい。m（）——（）m

プロローグ1

「ーハア、ハアー」

夜の闇に沈む閑静な住宅街。

その街中を息が切らしながらも少女は走っていた。

少女を動かしている原動力。

それは『恐怖』と言う名の感情と死にたくない、と言う思いだった。その二つが今にも立ち止まってしまいそうな少女を必死に支えている。

後ろを振り返ると追手はーーー刃物を持った男は、まだ少女を追い掛けている。

「なん、で…」

何かをした訳でも無い。

何時も通りの日常だった。それなのに、何故。

自分が、『通り魔』の餌食として選ばれてしまったのか。

走って、走って、走って。辿り着いたのは、行き止まりだった。

防犯意識の高さからか、行く手を阻む壁は高く、少女に取って乗り越える事など不可能だった。辿り着いたのは、行き止まりだった。

行く手を阻む壁は防犯意識が強いのか、異常に高く、乗り越える事は、不可能に近い。

こんな結末を、運命を、少女は呪った。

壁にもたれて座り込んでしまった少女に男が近寄って行く。

死に間際の走馬灯。

その言葉が本当で有ったと、少女は身を持って体験していた。僅か十数年の人生。

その一コマ一コマが、ゆっくりと流れていく。

男が刃物を持ち直したのが見えた。

少女は目を固く閉じ、来るべき『死』に備えた。

――数瞬の後。

辺りに紅の飛沫が飛び散った。

プロローグ1（後書き）

コメントなど頂けたら嬉しいです。

白紙となった地図（前書き）

プロローグ1の扉の描写が二回重なっていました。
申し訳ありません。

m () m

白紙となった地図

初春にしては冷たく感じる、屋上の乾いた風。

その風に髪を揺らされ、風見一希はうつすら目を開けた。

一希は立ち上がり、体を反らす。パキパキと鳴る体は、長い間一希が其処に座り込んで居た事を示していた。

日の光を吸収しているかの様な漆黒の髪。

制服に身を包んだ体は、高校生にしては、背丈が高めだった。

一希はゆっくりと柵の側に歩み寄る。

この高校一私立月下高校の屋上からは、街が一望出来た。

否一街、ではなく世界、か。

半径10キロの円を描く壁。その中の街が、一希に取っての世界だった。

今から約25年前。

まだ、一希も生まれていない頃一

世界を巻き込んだ最後の戦争が有った。

第3次世界大戦。今ではそう呼ばれている。

事の発端は、たった一回の発砲だったらしい。

テロ行為が激化していた中東、其処のテロリストが治安部隊に対して行った威嚇射撃が命中。

それが発端となったテロリスト対治安部隊の戦いは泥沼化。

次第に戦火は中東各国に飛び火。

いつの間にか、テロリスト対治安部隊の戦いは国家対国家と言う状態となっていた。

普通ならば、この辺りで国連か何処かの機関が仲介し、終戦へと戦局は向かっていっただろう。

だが、そうなる事は無かった。

中東での戦争に乗り、中国、ロシアがあらゆる利権や資源を求め、アメリカ、東南アジアに侵攻した為だった。

2008年頃に起こった金融危機。それは、一時的に収まったものの、完全に収まる事は無かった。

更に、中東で戦争が始まった事で、只でさえ少なくなっていた石油などの資源が枯渇。

経済的な利権・資源を求め、戦争が勃発するのも、無理は無い状態だったらしい。

そして、それに続くかの様に、アジアは勿論、南米、北米、アフリカ、ヨーロッパ…あらゆる国が、互いに宣戦布告し、第3次世界大戦が始まった。

日本も例外では無かった。各国の軍隊の前に自衛隊は壊滅。民間人軍人問わず、死者は計り知れない。

大戦は始まって約五年で終結したが、別に各国が自らの愚行に気が付いた訳では決して無い。軍資金・兵力の消滅、他国の侵略に対する全面降伏、そして、戦略型核兵器の使用など様々な要因で、戦争を行う国家自体が消滅してしまったからだだった。

家族や住む場所を失い、生き残った人々は、二度とこのような事を繰り返さないように、と2055年に互いに永世中立を誓い、自衛力以外の一切の武力を放棄した。そして、世界各地に1―5つの都市を作りそれぞれの影響が比較的少なかった場所に1―5つの都市を作りそれぞれに第1―第5と都市に番号を割り振った。

国境が消え、世界地図が白紙になった瞬間だった。

だが、国境が消えたとは言っても、集団には、統治者が必要だった。人に人は支配出来ない、とは良く言った物だが、統治者が必要というのは、なんとという矛盾だっただろうか。かつて日本であった場所

に位置する第4都市の支配権を手に入れたのは、自衛隊が壊滅した後、日本を辛うじて壊滅から守りきったPMCだった。PMCに因って統治されている日本——第4都市の治安は、表向きには、PMCが統治しているからこそ、治安が保たれていると一般人には思われている。

そう、表向きには。

都市を眺めて居ると、ズボンのポケットに入っていた携帯が震え出した。一希は携帯を取り出すと、ディスプレイを一瞥、受話器のボタンを押して、耳に当てた。

「——何だよ、舞無（むな。）さん。」

『久しぶり、一希君。元気？』

その声には、僅かな笑いが含まれていた。

「舞無さんの声聞くまでは元気だったよ。」

聞くまでは、を強調し、一希は答えた。

『……まあ、そんな事はどうでも良いわ。それで。』舞無の声色が変わった。

例えるならば、冷たく冷えきった、鋭利な刃物。

「『依頼』か？」

それに合わせ、一希も声のトーンを落とす。

「そう。急で悪いと思うけど、今から事務所に来てくれない？」

「分かった。今から行く。」

一希は通話を切った。

そして、鞆を手にする——

柵を乗り越え、屋上から飛び降りた。

白紙となった地図（後書き）

テスト期間中に、小説書いて投稿する私は異常…？
感想など有りましたら、宜しく願いします。

タイトル修正のお知らせ

「白紙の地図と高校生のPGC」
へと、近日中に変更します。

ご迷惑をお掛けし、申し訳ありません。

事務所へ依頼（前書き）

遅れてすみません。

今回はちょっと長いのと、審査期間なので遅れました。

事務所へ依頼

落ちていく。

制服の裾が風で暴れ、耳を風切り音が支配した。

屋上から地面までの距離は、十数メートル。

その高さから飛び降りたのだとすれば、只では済まないだろう。

だが、一希の顔には焦りや恐怖などは、浮かんで居ない。

地面まで数メートルを切った所で、一希は足を曲げ、衝撃に備えた。

イーダント

数秒後には、一希は土埃に巻かれながらも、平然と地面に立つて居た。

第四都市は大まかに六つのブロックに区分されている。

主に行政機関が集まる中央のブロック。

商店が集まる東のブロック。

農場が広がる西のブロック。

住宅街の南のブロック。 工業地帯の北のブロック。

そしてイー今、一希が歩いている、繁華街の北東のブロック。

別名『捨てられた街』。

このブロックだけには、第四都市の統治者であるPMCも関わろうとしない。だが、第四都市の嫌われ者達や、何らかの事情で、身を隠して居る者達が集まるこのブロックは、他のブロックに比べても、明らかに活気に満ちていた。

一希は五月蠅い雰囲気は好きではない。

だが葬式のような、重い雰囲気も嫌いだった。

静か過ぎず、五月蠅すぎずイーそれが、一希の最も好きな雰囲気

気だった。

北東のブロックに入り、歩くこと数分。
一希は、三階建ての雑居ビルの前に居た。ビルの壁面はひび割れ、仮に地震が来たら、数秒で倒壊してしまいそうだった。

正直、この中に入る事に一希はかなりの躊躇いが何時も有ったが、今では気にしない様になっていた。

だから、入り口の階段に足を掛けた時、頭上から僅かにコンクリートの欠片が混じった埃が降ってきて、一希は気にしなかった。否、気にしなくなかった。

二階に上がると、壁の雰囲気は全く合っていない扉が有った。扉には、筆記体で『Tukisita Private Guard Company』と綴られていた。

今にも倒壊しそうな、雑居ビルの二階。

此所が、一希が所属するPGCの事務所だった。

扉を開けると、一人の少女が、デスクの上で書類を広げていた。

「案外早かったわね、一希君。」

書類から目を離し、一希に目を向ける月下高校の制服を着た少女。彼女こそが、一希の雇い主であり、月下民間警備会社の社長、月下舞無。

因みに、舞無の祖父は『月下』と言う名字の通り、一希達が通う私立月下高校の理事長だ。

舞無自身も生徒会長の地位に就いて居る。

「舞無さんが早く来いって言うから急いで俺は着たんだが。」

肩をすくめ、一希は事務所の隅に置いてある自分のロッカーを開く。

その中には、防弾チョッキ、拳銃など、この仕事には欠かせない物が詰め込まれていた。ロッカーは全部で三つ有ったが、使われているのは、二つだけだった。

「で、依頼って何だよ。また、殺し合いか？」 実際、これの
つ前の依頼が、ヤクザの掃討だった。

「違うわよ。何時も何時も、そんな血生臭い依頼ばかり受けたり
しないわ。」 それを聞いて一希は、自分が銃を使う必要が無かつ
た依頼は何れ程有ったかを思い出そうとしたが、止めた。

そんな事、指で数えられる程しか無かったからだ。 如何わしい
視線を舞無に向かつて照射していると、突如、何の合図も無しに扉
が開いた。

刹那――

一希は、拳銃をホルスターから抜くと、銃口を扉に向ける。

この事務所に来る人間は多くない。 もし仮に依頼人であったな
ら、扉の脇に有るチャイムを鳴らすか、ノックをしている筈だ。

一希が、チャイムを鳴らしたり、ノックをしなかったのは、予め
舞無に呼び出されて居たので、舞無が来訪を知っていたからだ。

となると、敵か味方が。 当然だが、一希は恨みを買わずに今
まで生きてきた訳ではない。

PGCと言う職業柄、何時鉛玉が飛んできてもおかしくないのだ。
だが、今回扉の向こうに現れた答えは、後者だった。

「……随分、物騒な歓迎ですね……」

その声と姿を認知した瞬間、一希は脱力し、銃口を下げた。

「舞無さん……どうして、雪華さんも来ると言ってくれなかったん
ですか……？」 扉の向こうで困惑した表情で立って居たのは、一希
と同じく月下民間警備会社に雇われて居る、彩萌雪華あやめせつかだった。 月
下高校の制服を着て、長い髪を後ろで束ねた彼女は狙撃銃を背負っ
ていた。

「いや、今から言おうと思ってただけ……来るのが予想外に早
かったわ……」 呆然とする舞無を尻目に、狙撃銃を下ろした雪華は、
小型のアタッシュケースを床に置いた。

「これが、今回の報酬です。」

ケースを開けると、札束が、二つ――200万円程入って居た。

「…ああ、有り難う、ご苦労様、雪華。」

混乱から回復した舞無がそう言つと、雪華は窓枠に腰を下ろした。
一希も、近くの椅子に腰を下ろす。「さて、今回の依頼は、護衛よ。」

二人が座るのを待って、舞無が切り出した。

「護衛、ですか？」

雪華が意外だと言う様に聞き返す。

「ええ。最近、女子高生が通り魔に殺されていると言うニュースを聞かない？」

「ああ…」

そう言えばそんな事を聞いた事が有る様な気がするな、と一希は思った。

「…でも、何で一希さんと私の二人が呼ばれるんですか？護衛なら、狙撃銃しか扱えない私より、拳銃が扱える一希さんの方が良いんじゃないですか？」

「それなのよ。」

舞無は溜め息を吐き、続けた。

「これが民間人からの依頼だったら、ね。」

「その言い方は、まさか…」

一希には、嫌な予感しかしなかった。

「ええ、今回の依頼人は、PMCよ。」

第四都市の治安は、PMCが守って居る。

一般人の常識は、そつだ。

それは確かに嘘では無い。

実際に、殺人事件等の捜査を行うのは、PMCだ。だが、稀に、PMCが手に負えない犯罪が発生する事も有る。

そんな時、PMCは、多額のコネで、密かにPGCに依頼をする。

否、依頼をする、と言うよりは、丸投げする、と言った方が正し

いか。

依頼の内容は様々だ。

今回の様に、護衛をする事で、次の被害を食い止める為の物や、明らかな殺戮行為等のPMCが出来ない『黒い』仕事等々…

少なくとも、全て命を賭ける必要が有る仕事ばかりだった。

そして、仮にPGCの人間が依頼の最中、犯罪者等を逮捕したとしても、一般に知られる事は無く、全てがPMCの手柄としてマスコミには、伝達される。

PMCに因る第四都市の統治は万全だと、知らしめる為に。

その代わりと言うのも何だが、PGCの社員には、銃器の所持、使用等の、多くの権限が与えられていた。

人の殺害、と言う一点を除いては。

「つまり、PMCが依頼してきたから絶対に失敗する事は出来ない。だから、念には念を入れて、俺と、雪華さんの二人にこの依頼に取り組んで貰う…そう言う事ですか？」

「流石ね、一希君。物分かりが良くて助かるわ。……なら、二人

共、明日からこれで頼むわ。」

妙な早口と共に差し出されたのは……制服？

いや、只の制服だったらまだ良い。

それは、男子の物と形状が多少異なっていて、下は……スカート？

「あの…もしかしてこの制服って…？」

雪華が恐る恐る問う。

それに対して舞無は、わざとらしく視線を反らした。

だが、一希は逃がさず舞無を追撃する。

「女子高の制服ですよね。」

それは、月下高校の姉妹高校、逆瀬女子高の制服だった。

「……安心しなさい。……只だったから。」

遠い目をしながら舞無は言ったが、勿論そう言う問題では無い。

「舞無さん。…俺、男なんですが。」

「そのくらい、見れば分かるわよ。」

即答だったものの、声は僅かに小さかった。

「まさかとは思いますが……護衛対象が、逆瀬女子高の生徒で、俺達に女子高に潜入しろ、とか言うんじゃないですよね。」

「……」

舞無の沈黙が、肯定を意味して居た。

一希は、雪華が来るまで舞無が依頼内容を話そうとしなかった訳が分かった気がした。

…雪華にフォローを頼む為だ。

その証拠に、さつきから舞無は視線で雪華に救援信号を送って居る。

その救援信号を受け取った雪華は、困惑半分、哀れみ半分、という様な表情で口を開いた。

「まあまあ、一希さん。一度着てみたらどうですか？一希さん自身の素材も良いですから、案外似合うかも知れませんよ?」

「いや、仮に似合ったとしても嬉しく無いですよ!!」
全くフォローになって居なかった。

と言うか、何処の世界に、女装が似合っただけで喜ぶ男子高校生が居るんだ。いや、仮に居たとしても、もうそいつは確実に末期だろう。精神的な意味で。

「でも、仕方ないじゃない。偶然この学生が当たっちゃったんだし。」

「舞無さんが開き直ってどうするんですか!?!」

数分後。

一希が折れた……

舞無が実際に、PMCから来た依頼書を一希に見せ、雪華が仕事だからしょうがない、と必死にフォローした結果だった。

こうして、一希と雪華は、逆瀬女子高に潜入、護衛の任務に当たる

事となった。

事務所へ依頼へ（後書き）

注意……作者に女装癖は無いです。

一希が持つ拳銃と雪華の狙撃銃の名前募集します。コメントなどで
お願いします。

まあ、コメントなかったら作者が考えますが…

ご感想、ご意見、お待ちしております。

二人の『かずき』（前書き）

考查が終わりました。

これからは、四日に一回位のペースで更新したいと、考えております。

二人の『かずき』

「このド変態。」

南ブロックの住宅街、其処に位置する一希の自宅。

事務所から帰って来た一希に対しての家人の第一声は、お帰り、など優しい物では無かった。

まあ元々、この家人にそんな台詞は期待していなかったのだが。

「帰って来るなり、いきなり酷いな、一姫……」

風見一姫。

それが一希の唯一の家族であり、たった一人の妹の名前。

ところが、兄妹にしては、容姿はかなり異なってる居た。

只一点を除いては。

「何で女子高の制服を持って帰って来た変態に普通に接してやる必要が有るんですか。」

「兄を変態呼ばわりするな！！それに、これは俺が望んで帰って来た訳じゃねえ！！」

一姫に変態呼ばわりされる原因となった、逆瀬女子高の制服が入った袋を振り上げ、一希は叫んだ。

すると一姫は哀れみを込めた目で言った。

「ああ、PGCを首になつて、今度はオカマバーにでも就職するんですか。良かったじゃ無いですか、直ぐに再就職出来て。」

「……………」

一生、この妹には舌戦で勝てないのだろうな、と一希は確信した。

「ところで兄さん。」

「何だ？」

「何時まで靴を履いて玄関に立ってる積もりですか？」

一希は未だ、玄関から上がれて居なかった。

夕食を食べた一希達は、テレビでニュースを見ていた。

今日もニュースは事故だの殺人だの、どうでも良い事ばかりを喋って居る。一希も一姫も、どんなニュースにも眉一つ動かさない。

一希は、ふーん、位にしか思わないし、一姫に至っては何とも思っ
て居ないだろう。

人の一人や二人、傷付く事など、当たり前だと知っているからだ。

この世に於いて、『幸せ』と『不幸』の総量は常に一定だと二人は
思っている。誰かが幸せになれば、誰かが必ず不幸となる。

故に、誰もが幸せな世界など存在しない。

何故なら、この世界では、身長や体重と言ったステータスですら、
不幸となつて自らに降り掛かつて来るのだから。

一希はPGCの仕事の中で、一姫は学校で、それぞれそれを知つた。
否、自らの身を持って体験した。

だから、ニュースを一希は同情もせず流すし、一姫は只それを『
情報』として処理していた。

ニュースが終わると、二人はテレビを消した。

バラエティー番組にも、ドラマにも二人は全く興味が無い。

だから、二人は芸能人の名前など一人も知らない。

だが、その所為で、二人の生活に影響が出た事など無かった。なぜ
なら、一希の数少ない友人も芸能人関連の話は苦手な有つたし、一
姫には、一希やその知り合い以外に会話する相手すら居なかったか
らだ。

テレビを消すと、一姫は戸棚から目薬を取り出し、目に差した。

「やっぱり痛むか？」

一希は目を閉じて居る一姫に声を掛けた。

「少し痒い程度です。問題有りません。」

そう言ってから開かれた一姫の両目は――紅に染まって居た…

一姫だけでは無い。

一希の右目も、紅に染まって居る。

勿論充血などでは無い。

もし充血なら、虹彩まで紅に染まる筈が無い。

医師に診てもらった事も有るが、詳しい事は分からなかった。

では、何時からこうなってしまったのか。それも定かではない。何故なら、二人には、五年から前の記憶が全く存在しないからだ。

一希に取っての最初の記憶は、この家の居間で、目覚めた事だった。

分かって居たのは、自分の名前と、両親は居ない事、そして、一緒に倒れて居た少女が妹の風見一姫だと言う事だけだった。

自分の右目と一姫の両目が紅いと気付いた事、月下舞無や彩萌雪華と出会ったのは、少し後の事である。

目覚めてから五年間、二人は必死だった。生きる事に。

両親と言う名の庇護者は二人には居なかったので、生きる為の金は自分達で稼ぐしか無かったのだ。

結果、一希は高校生の身でも大金が稼げるPGCの社員になり、一姫は家事でそれをサポートする。どちらかが、成り立たなくなれば、どちらも成り立たなくなってしまう関係。

信頼し、協力はしているが、互いに過度な依存はしていない兄妹の関係が、磐石な物に見えるか、不安定な天秤の様に見えるかで、この兄妹の見え方は随分と違うだろう。

一姫の目に支障が無い事を確認した一希は、二階の自室へ向かった。最低限の家具しか置かれて居ない部屋には、僅かな火薬の匂いが漂って居た。

一希はデスク脇の椅子に座ると書類を――事務所で、舞無から貰って来た依頼書を読み始めた。

今まで、一希が高校生と言う身で、数々の依頼を達成してきた原因の一つは、この情報整理に有る。

何をすれば良いのか、その為には、どんな武装で、どう動けば良いのか。不測の事態には、どう対応すれば良いのか。綿密なスケジュールを頭の中で組んでいく。

特に今回は、周囲にバレたら其処で終わりなので、何時にも無く一希は真剣だった。

幾ら渋ったとしても、やると決めたなら、真剣にやる。それが依頼に対する一希のやり方だった。

書類を読み終え、情報を整理した一希は、部屋を出ると、向かいの一姫の部屋のドアをノックした。

「はい。」

「俺だ。入っても良いか？」

以前、ノックだけして入った時、酷い目に遭った事が有ったのでそれ以来一希は絶対に声を掛ける事になっている。

暫くごそごそと音がした後、答えが返って来た。

「どうぞ。」

開けた先には、一希の部屋と同じ様な飾り気が無い、最低限の家具しか置かれて居ない部屋が有った。

違う所が有るとすれば、一姫の部屋に置いて有るベッドが、一希の部屋には無いと言う事位だ。

一姫は、ベッドに腰掛け、小説を読んで居た。

「何の用ですか、兄さん。」

冷めた視線は相変わらず小説のページに落とされて居たが、一希は全く気にしない。

「いや、頼みが有るんだが。」

其処でやっと、一姫は顔を上げた。

「頼み？兄さんが私にですか？」

「ああ。……お前の名前を明日から貸してくれ。」

「は？」

全く予想して居なかった言葉に一姫は、豆鉄砲を喰らった様な顔をした。

「いや、明日から、逆瀬女子高等学園に潜入するんだが」

「変態。後却下。」

「何でそうなる!？」

最後まで言わせて貰えず、即答で返答と侮蔑の言葉の両方を貰った一希は、事情を知らない第三者から見れば確実に変態だった。

「覗きとかする為に潜入するんでしょう? 確実に変態以外の何物でも無いです。」

「お前は俺をどんな風に見てるんだ!？」

「犯罪者。」

そう言つて一姫は携帯を弄り始めた。番号を押している事から掛けようとしているのは…

「何通報しようとしてる!？」

「覗き魔の未遂の摘発ですけど。」

「違う! 良いか、一姫。俺は明日から護衛任務で、転校生として、逆瀬女子高に潜入するんだ。雪華と一緒に。だけど、そのままの名前じゃ不味いだろ? だから、俺はお前の名前を貸してくれって言いに来た。これで良いか？」

「……『依頼で』と言つ言葉を付け加えて居ない兄さんが悪いんですよ。」

「……日本語って難しいね〜」

はぐらかそうとする一希を一姫は追撃する。

「逃げないで下さい、それは只の現実逃避です。」

「……で、答えは？」

溜め息を吐くと一姫は言った。

「……余り、多様しないで下さいよ。」

「……悪いな。」

「仕方ないですよ、私達が生きる為ですから。…でも。」

「何だ？」

部屋を出ようと、一姫の言葉を背中で聞いていた一希は立ち止まり、振り返った。

一希の視線の先、其処には、さっきまでの冷めた視線から一転し、不安を視線に混ぜた一姫が居た。

「絶対に、無理だけはしないで下さい。」

それは、何度でも一希を変態呼ばわりする一姫の本心。

自分の為に、傷付かないで欲しいと言う、願い。

「…ああ、分かっている。」そんな一姫に対して、一希に出来たのは、言葉を返す事だけだった。

「じゃあ、兄さん。おやすみなさい。」

「ああ、良い夜を。」

そう言って、一希は部屋を後にした。

二人の『かずき』（後書き）

タイトル修正

『白紙の地図と高校生のPGC（half red eyes）』
に、投稿日から、一週間後12月8日に変更します。
ご迷惑をお掛けします事を、お詫び申し上げます。

コメントをお待ちしています。

逢魔の時(前書き)

短いです。

逢魔の時

浅い眠りと深い眠り。

それらを繰り返す内に、気が付けば夢を見ていた。

夢だと分かる夢、つまり明晰夢と言う物を見ているらしい。

紅蓮と黒。

それが視界を埋め尽くす全てだった。

パチパチと何かが爆ぜる音と、怒号が聞こえる中で、黒煙や熱気が、身体を覆って行く。

目の前は、炎が支配していた。

逃げないと。

だが、その思いとは裏腹に、身体はその場から動かない。

パチパチと言う音に彩られ、全てが等しく炎の前で灰に変えられて行く光景。

此処が地獄で無いのなら、何処が地獄だと言うのだろう。

煙を吸い込み、激しく噎せた彼は自らの死を覚悟した時だった。

「ほら、起きて。」

声が出したが、彼は反応しなかった。

それが死に間際の自分に、掛けられた声だと分からず、幻聴だと思っていた。

だから、

「其処の貴方。起きて。」と、再度声を掛けられる迄、彼はその声に反応しなかった。

そして、その声が自分に向けられた物だと分かったとしても、彼は反応しなかった。

否、出来なかった。

彼の意識は既に深い闇の中に沈み掛け、声を出す事すら、叶わなか

ったのだから。

声の主は暫く黙って居たが、やがて溜め息を吐くと言った。

「まだ、貴方は死ぬべき人間じゃ無い。けれど、私に貴方の生死を決める権利は無い。だから、選びなさい。此処で灰になるか、それとも、私の手を取って生きるか。」

最早、身体一つ満足に動かせない彼に向かって、彼女は手を差し出した。

其処から先は、分からない。

「……また、出やがった。」

夢から目覚めた一希は、壁に掛けられた時計に目をやる。

夜光塗料が塗られた針は、午前二時を示して居た。

何時もの様に椅子に座って眠って居た一希は、電気を付けた。

屋上から飛び降りる勇氣は有れど、悪夢を見て二度寝する勇氣は、

一希には無い。

一希は、寝る前に側に置いた鞆を引き寄せ、ファスナー開ける。

一見すると、外見中身共に一学生の鞆としか見えないそのの底板を

一希は外した。

底板の下、其処には拳銃が収められて居た。

取り出した拳銃を一希は手で弄ぶ。

悪夢に起こされた時や、どうしても眠れない時に、武器を弄ぶのが、

一希の癖だった。

一希に取つての睡眠は、それほど大切な物では無い。少なくとも、身体が拒否したのならば、無理にするべき事でも無かった。

紅と黒。

左右非対称の色をした目で拳銃を見つめながら、弄ぶ。

そうして居る内に、何時の間にか夜は更けて行き、護衛一日目の朝が来た――

逢魔の時（後書き）

コメント、感想等、お待ちしております。

護衛一日目　く邂逅く（前書き）

寒くなって来ましたね

作者は寒いのが苦手です。土日は常に引きこもりです。

護衛一日目　く邂逅く

私立逆瀬女子高等学園。

通称、逆瀬女子高。

第四都市でも、一、二を争う設備と、歴史を誇る高校。

中央に聳え立つ時計塔が、この高校のシンボルとなつて居る。

その時計塔の足元——時計塔広場には、逆瀬女子高の制服に身を包んだ雪華が立つて居た。

回りを同じ制服を着た他の生徒達が通り過ぎて行く中で、雪華は腕時計を約一分置きに見ていた。

「遅いですね、一希さんは…」

そう言つた後、雪華は、傍らに立つもう一人の少女を見た。

彩萌雪華ともう一人の少女が其処で立ち止まって居る訳。

それは——

「本当にどうしたんでしょう、一希さんは。」

今日から共に任務に当たる一希が、待ち合わせの時間を過ぎても、現れないからだった。

雪華と少女が待つて居る逆瀬女子高から、約五十メートル離れた地点の歩道。

其処を一人の少女が駆けていた。

否、少女では無い。

「まさか、準備に手間取る何て…」

声すら変わつて居たものの、その顔には僅かな面影が残つて居る。

そう、一希だった。

一希が遅刻した理由は簡単。

思つて居たよりも、メイクに手間取つてしまったからである。

だが、遅刻しそうになるまで、時間を掛けたお陰なのか、一希は、すれ違つた人間十人中九人ほどが振り返る程の美少女に変貌して居

た。

雪華と、護衛の対象者に対する、お詫びの言葉と言いつきを考えながら、一希は校門を走り抜けた。

「……悪い、遅れた。」

既に人通りの少なくなった待ち合わせの場所には、当然ながら二人の姿が有った。

一人は言うまでも無く、彩萌雪華。

雪華は、長髪を何時もの様に軽く纏め、伊達眼鏡を掛けて居た。

足元には、恐らく狙撃銃が入って居るであろう楽器ケースが置いて居た。

そしてその隣に、一人の少女が立って居る。

背は低めで、一希よりも僅かに背が低い雪華よりも、更に低い背丈だった。

髪は、背と同じ様に短い。目は、何処か小動物的な印象を二人に与えた。

今まで彼女を見て、童顔……と言つ言葉を浮かべたのは、一希だけでは無いだろう。

中学生と言われても頷ける様な容姿だった。

昨夜、資料で写真を見て把握はしていたが、一希は自己紹介を兼ね、本物であるか確認する事にした。

「遅れてすみません。月下PGC事務所の風見一希と言います。今日から、其処の彩萌雪華と共に、貴方の護衛に就かせて貰います。」

隣の雪華も一希に合わせ、頭を軽く下げる。

「あつ、すみません。私は、古手毬^{こてまり}慧^{すい}と言います。今日から宜しくお願ひします。」

幼そつな外見とは、裏腹に、意外としつかりした性格の様だと一希は思った。

互いに自己紹介を終えた時、頭上の時計塔の鐘が鳴り出した。

「始業十分前ですね。…えっと、お二人は、理事長に挨拶しに行く

「んですよね？」

「はい。」

「分かりました。理事長室は、一番校門から近い管理棟の二階の一番奥です。では、後程教室で。」

そう言つて慧は校舎の入口へと駆けて行つた。

慧が、校舎の中へと消えるのを見届けた後、雪華が切り出した。

「意外に、遅かつたですね、一希さん？」

雪華は以前にも一度、一希の女装を見ているので、その変貌に大して動揺していなかつた。

「メイクに手間取つただけだ。それよりも。」

一希は、困惑の視線を雪華に向ける。

「何で、舞無さんは、俺の服のサイズを知つてたんだ？」

その言葉の通り、一希の制服のサイズはぴったりだった。

「さあ…でも、舞無さんですから…」

そう返す雪華の制服のサイズも一希と同じ様に、ぴったりだった。

「あの人、プライバシーの権利つて言う言葉を知つて居るのか？」

「服のサイズがプライバシーに入るかは、結構難しい事でしょうけど…でも、知つて居ると思いますよ。少なくとも、その言葉の意味は。」

二人して、溜め息を吐いた所で、一希はある事に気付いた。

「雪華さん、ペンダントは？」

何時も雪華は、写真が入るペンダントを掛けて居た筈なのだが。

因みに、写真の中身は、一希は勿論、一緒に暮らしている舞無でさえも見た事が無かつた。

「ああ、あれは、制服の下に隠れる様に掛けてます。流石に、校則違反か分からない状態で、堂々と掛けて居るのもどうかと思いますから。」

そう言つて、雪華は、首筋の襟に隠れたチェーンを引っ張つて、持ち上げて見せた。

その指先には、確かにチェーンが掛かつて居た。

「なら、行きますか。」

「そうですね。確か、校門に一番近い校舎でしたね。」

二人は歩き出したが程無くして、雪華が言った。

「思ったんですけど、あの人、高校生、何ですよね…？」

どうやら雪華自身も、一希と同じ事を感じたらしかった。

広大な敷地を持つ、逆瀬女子高。

その理事長室に二人は居た。

部屋には、如何にも高そうな調度品が置かれており、物を僅かしか置かない主義の一希に取っては、居心地は余り良い物では無かった。思った所で、言う積もりは毛頭無いのだが。

「では、これから数日間、宜しく頼みます。」

そう理事長が締め括った時、見計らって居た様に、扉がノックされた。

「入りたまえ。」

扉が開かれた先に居たのは、白衣を来た若い男性教師だった。

「ああ、丁度良かった篤君。…紹介しよう。君達がこれから入って

貰う二年A組の二神ふたがみ篤先生だ。」

「どうも、二神です。」

二神が頭を下げるのに合わせて、二人も頭を下げた。「なら、二神

先生。後は任せましたよ。」

「分かりました。…なら行くか、えっと、風見に、彩萌。」

三人は、理事長室を後にした。

…一希達は気付いて居ただろうか。

理事長が冷たい目で、三人を見送った事に。

所は変わって二年A組の教室の前。

「えーっと、今日何か有ったと思うが……忘れた。」

あんた本当に教師として大丈夫か？と、二神の言葉が聞こえた一希

は——少なくとも一希はそう思った。どうやら、二神は恐ろしい程やる気無しの教師の様だ。

「転校生が居るって聞いたのですが本当ですか？」
中から聞こえた声で、教室がざわざわとし始めた。

「あー、転校生ね。うん。居るね。二人も。……おい、入れば？」
普通其処は入れー、だろうと思ったが呆れ果てた一希には、何も言う気は起きなかった。

引き戸を開け、中に入ると、四十人の視線が照射された。

「えーっと……各々で自己紹介して席に座ってくれ。席は一番後ろの古手毬を挟んだ二席だ。向かって右側が彩萌、左側が風見だ。」
そう言うと二神は、教卓に突っ伏した。

二神もある意味凄いが、その教師の行動を平然と流す生徒達も凄いなと、一希は思った。

「風見一姫です。宜しくお願いします。」

「彩萌雪華と言います。宜しくお願いします。」

こうして、二人の任務は始まった。

護衛一日目 く邂逅く (後書き)

アクセス二百突破しました。有難うございます!!
これからも宜しくお願い致します。

護衛一日目　く異変く（前書き）

お待たせしました。

護衛一日目　〜異変〜

転校生が転校して来た初日、最もよく有るイベントが有る。元々居た生徒――ークラスメイトからの質問責めである。

一時限目。

授業時間であるにも関わらず、二年A組の教室は喧騒に満ちていた。その喧騒の渦の中心は言うまでも無い。

「ねえねえ、風見さんって前は何処の高校に居たの？」

「彩萌さん、髪綺麗〜！どんな手入れしてるの？」

一希と雪華だ。

そもそも、この臨時の質問責めが始まる事となった発端は――ホワイトボードに『自習』と殴り書きし、教卓で居眠りする二神にある。

所謂、授業放棄だ。

先程のホームルームでもそうだが、二神の教師としてのやる気はゼロだと、一希は――正確には雪華もだが――確信していた。

こういう社会人を間違いない、『給料泥棒』と定義するのだろう。

だが、二人に取って今は二神等の事を考えて居る暇は無かった。

「前は第4都市高に居て、両親の都合で此処に転校したんです。」

「えっ、髪ですか？そんな大した事はしてませんよ？」

二人とも、一対一、一対少数人数の会話なら手慣れている。

だが、一対大人数の会話、それも、一方的な質問責めには慣れていない。

二神を気にするよりも、己に向かって来る質問に掛かりきりだった。故に、一時限目終了のチャイムが、試合終了のゴングに聞こえたのは、満更聞き違えでも無かっただろう。

顔を真顔に戻すと、筋肉が引き吊った感覚がした。

「……やっつと、お昼ですか……」

「そう……ですね……」

一時限目が終了してから、質問責めは弱まったが、完全に収まった訳では無い。寧ろ休憩時間を狙って、他クラスの生徒達が、A組の面々に代わり、質問責めに来たのだ。

その為、二人は今迄……朝のホームルームから昼食時、屋上に来る迄、作り笑いを保つ必要があった。

「月下じゃあ、あんな光景は有り得ないな……」

周りに人が居ない事を確認して、一希は口調を戻して喋った。

因みにこの高校では、屋上が解放されて居た。

だが、まだ時折冷たい風が吹く事も有ってか、屋上に一希達以外の人影は無かった。

「そもそも彼処では、私達は転校生では無いですからね。」

「この鬪い、午後も続くと思うか？」

余り答えに期待せずに、一希は投げ掛けた。

「続くと思いますよ。寧ろ午後からの方が人が多いと思います。」

「誰かの救いの手とか、来ないかな……」

一希がそう呟いた時だった。

「お疲れ様です。」

その言葉と共にやって来たのは、慧だった。

手には、三本の紙パックを握って居た。

そして、その紙パックの二本を一希達に差し出して来た。

「すみません、有難うございます。」

「いえ、大した値段でもありませんし。」

一希は、素直にパックを受け取り、ストローを突き刺した。

ついでに、購買で購入したパンの包装を破き、一口口に運ぶ。

雪華や慧も、各々の昼食を口に運んで居た。

会話は無い。

一希も雪華も、基本積極的に話す方では無いし、慧も、何を話せば良いのか分からない。

だが、その沈黙が、二人に取つての本当の休憩になつたのは、明らかだった。

「帰りの際の事なのですが。」

食事が三人とも終わった事を見計らつて、雪華が切り出した。

「帰りは、何を使われますか？」

口調も先程一希と話して居た時の気を抜いた物から、変化して居た。「普段なら、徒歩なんですけど、今日から家の者に車を寄越して貰う事になつて居ます。…駄目でしょうか？」

「いえ、そちらの方が良いと思いますよ。徒歩だと、通り魔に襲われる確率は、恐らく上がるでしょうから。」

今迄に襲われ、殺害された被害者全てが、路上で殺されて居る。

車を使う事は、『路上で襲われる』と言つ前提を覆す事が出来るだろう。

だからと言つて、油断する様な甘さは、二人共持ち合わせて居なかつたが。

「お二人は、車でも、付いて来られるのですよね？」「ええ。指令に、『対象の帰宅の確認』と言つ項目が有るので、一緒に帰宅させて頂く事になると思います。」

「そうですね。なら、宜しくお願いします。」

慧がそう言つて頭を下げた時、チャイムが鳴った。

「授業が始まりますね。急ぎましょう。」

一希は、生まれて初めてチャイムと言つ物に、殺意を抱いた。

午後からの授業と、相変わらず激しい質問責めを潜り抜け、放課後がやって来た。

逆瀬女子高は部活動が盛んで、あれだけ群がつて居たクラスメイト達は、各々の部活へと去つて行った。

立ち去つて行く前に、クラスメイト達に、部活動に勧誘されたが、二人共、この学校には、学生生活を送る為に来て居る訳では無い。

二人は適当な理由を付け、上手くあしらった。
慧は、この高校では数少ない『帰宅部』所属なので、遅く迄学校に残る事は無い。

最も、通り魔が都市を騒がす様になってからと言う物の、部活動の時間短縮と言う措置がこの学校では、取られて居たのだが。

「なら、帰りましょうか。」

「ええ。」

三人は、学校を後にした。車を学校に横付けさせる訳にもいかない
ので、慧の家の車は、校門から少し離れた所に駐車して貰って居る。
一希は、学校を出る前に、鞆の底板の下に仕込んだ拳銃を太ももの
ホルスターに移した。

今までの状況から考えると、襲われるには僅かに時間が早い、油断をする積もりは無い。

PGCである自分達に何時鉛玉が飛んできてもおかしく無いのと同様に、何時何が起こっても分からないのだから。

「これが家の車です。」

「……」

「……」

校門から僅か百メートル。其処にその車は停車して居た。

「えっと、お二人共、どうしました？」

啞然とする二人を見てか、慧は問う。

「…いえ、まさかりムジンとは思わなかったので。」そう。

三人の前に停車して居たのは、一台のリムジンだった。

当然と言っては何だが、運転手付きだった。

「お帰りなさいませ、お嬢様。どうぞ。」

「ありがとう。」

運転手が開けたドアから、慧はリムジンに乗り込んだ。

その乗り方は、明らかに慣れて居ると確信出来る程スムーズだった。

「これは……」

「流石に予想してませんでしたね。」

何があったとしても、対応出来る様に考えて居た二人だが、まさかリムジンが停まって居るとは思わなかった。

「どうぞ、乗って下さい。」

慧の招きに応じて、一希達は、リムジンに乗り込んだ。

中を見た目よりも広く、ゆったりしている。

シートも慣れれば座り心地は良いのだろうが、慣れて居ない今は、落ち着こうと言う方が無理だった。

三人が乗り込んだ後、リムジンは発進した。

路面が良いのか、車が良いのか、……恐らく後者だろう……揺れはほとんど感じない。

実は動いて居ないと言えば、信じてしまえそうだった。

「今日はお疲れ様でした。」

ある程度落ち着いたのを見てか、慧が頭を下げる。

「いえ、仕事ですから。……それに、まだ何か有った訳でも有りませんし。」

雪華が応じる。

「でも、お二人が居たお陰か、久し振りに安心して学校の敷地外を歩けましたよ。通り魔が現れてから、安心して街を出歩く事が出来なかったのです。」

「そうですね。なら、良かったです。」

「明日からも宜しくお願いします。」

「此方こそ。なら、明日ですが……」

雪華と慧が話し込み始めたので、一希は窓の外に目をやる。そこで、気付いた。

「……どういう事だ」

一希に取っては、呟きとも言える声も、車内では、問い掛けも同然だった。

「……どうしました、一希さん？」

「雪華さん。確か車を使用した帰宅ルートは、学校が有る中央プロ

ツクから、住宅地の南ブロック迄のルートだよな。」

「…そうですけど?」

「それがどうかしたんですか?」

どうした急に、と言わんばかりの二人に一希は窓の外を見せた。

「なら、どうしてこんな所を走ってるんだ。」

「え…?」

「何で…?」

中央ブロックから南ブロックへと向かって居るのなら、窓の外に広がるのは、住宅地か、オフィス街でなければならぬ筈だった。その筈が――

「何で、都市高速に乗って居るんだ?」

窓の外に広がって居たのは、騒音防止の灰色の壁だった。

「どういう事、ドライバー!!!」

声を荒げる替に返って来たのは、ドライバーの声と――

「すみません、お嬢様。こんな物が運転席に…」

一枚の便箋だった。

それに記されて居た言葉は――

『この車には爆弾が取り付けられている。爆破させたくなければ、時速七十キロで車を走らせる。これを違えた場合、この車は爆破される。又、外部に助けを求めたりした場合も爆破される。』

通り魔』

如何にも分かりやすい、脅迫状だった。

護衛一日目 く異変く (後書き)

本来、一つのパートにしようと思ったのですが、思ったよりも長丁場になりそうなので、二つに分ける事にしました。

急いだったので、誤字脱字有るかも知れませんが、ご容赦下さい。

先日、予告した通り、12月8日にタイトル変更致します。

新タイトル

『白紙の地図と高校生のPGC くhalf red eyesく』
です。

護衛一日目　く脱出く（前書き）

遅くなって申し訳有りません。
私用で忙しかったので。

護衛一日目　く脱出く

自称『通り魔』からの脅迫状を受け取った一希達は、リムジンの後部、その中央に設けられたテーブルの上に広がる道路地図を見ていた。

「どうしましょう?」

雪華が現在地を指差し、言った。

その声には、何時もの様に動揺は含まれて居ない。

今更ながら、爆弾一つごときで慌てる様なほど、一希や雪華は一般人では無かった。

その所為か、車内には落ち着いた雰囲気か漂って居た。

「取り敢えず、このまま此処に居る訳には行かないな。」

今、リムジンは西プロックの高速道路を走って居る。少なくとも、今の所は。

勿論、車は何時までも走り続けられる訳では無い。

ガソリンが切れたら、走れなくなり、脅迫状が本当なら、この車は爆破されるだろう。

「取り敢えず、残りのガソリンの量次第だな。……鳥遊さん、後どの位走れますか?」

一希は運転手……鳥遊に声を掛けた。

「…この速度でこの量だと、持つて後一時間ですな。」

「一時間ですか…」

今では殆どの車はハイブリッド化されて居るが、元々搭載されて居たガソリンが僅かだったのかも知れない。

一時間と言う少ない猶予で、四人が脱出する手立てを考えなければならぬ。

「…ドアを開けて、周囲の車に助けを求めると言うのは駄目でしょうか?」

恐る恐る、と言った様子で慧が言った。

「駄目だと思います。多分、その事も考えてドアを開けた瞬間に……」
「なら携帯で……」

「電波を感知されて爆破される可能性が有りますから、それも駄目だと思います。それに、」
雪華は一端言葉を切り、言った。

「脱出するにせよ、まず、周囲の車をどうにかしないと。」

前述した通り、此処は高速道路の上だ。

脱出しようとするれば、リムジンは、爆破されるだろう。

爆弾の威力が、分からない以上、周囲の車を巻き込む可能性が十分に有った。

「そもそも、爆弾は何処に有るんでしょう？」

「見たところ、車内には無さそうだな。」

リムジンに乗った時、一希はさりげなく周りを見たのだが、爆発物らしき物は無かった。

「もしかして、車外に有るんでしょうか？」

「まあ、どっちにしろ爆弾の時点で俺達には出せないけどな。」

銃火器の扱い方を知っている一希と雪華も、流石に爆弾の解除方法は知らない。そんな事が出来そうな知り合いは居たが、こんな状況では意味を成さない。

正に八方塞がり、と思えたその時だった。

「皆様。」

鳥遊が、静かに言った。

「車が居ない所で有れば、ございますが。」

「……鳥遊。それは何処ですか？」

鳥遊は振り返り——勿論運転中、立派な余所見運転だ——地図の一部を指差した。

その指の先で差されて居たのは——

「これって……建設中の橋？」

「はい。」

誰もが言葉を失い、沈黙する。

「…其処には、どうやったら行けるんですか？」

「一希さん？何を言ってるんですか？」

いち早く混乱から回復した一希の言葉に、雪華と替は更に混乱する。唯一、ハンドルを握る鳥遊だけが落ち着いて居た。

「此処から直ぐの所に分岐点があります。其処を過ぎれば直ぐです。」

「其処に向かつて下さい。」

「…お嬢様。宜しいですか？恐らく、車は只では済まないと思いませんが。」

沈黙の中、鳥遊は自らの主に問う。

「…構いません。この車に爆弾が積んで有る以上、最悪、爆破される事も考えてましたから。」

「承知しました。」

二人の会話が終わると同時に雪華が切り出す。

「…で、橋まで行ったとして、どうするんですか、一希さん？」

「さつきから考えて見たんだが、このまま車で走り続けるのも、爆弾を解除するのも駄目なら、やっぱり『飛び降りる』以外に無い。」

どっちにしる脱出しなければならぬしな。」

「…時速70キロの車から飛び降りる曲芸が出来る人間が、この世界に何人居ると思ってるんですか？私や一希さんならともかく、二人はどうする積もりですか？」

無謀としか思えない脱出方法は、雪華を不安にさせたらしかった。

一希は落ち着いて答えていく。

「雪華さんはケースから銃を抜いて、背中に掛ければ後はうつ伏せの体勢でケースを下にすれば怪我はしない筈だ。」

高校に潜入する為に、雪華は狙撃銃を入れたケースを楽器ケースに偽装して居た。しかし、楽器ケースと言っても、外見だけで、その実態は、耐衝撃、防水、防弾と、ケースだけでもハイスペックだ。

まあ、中に入って居る銃を考えれば、ケースを用意した人間が、ケースにすら、気を配るのも分かるのだが。

「分かったけど、慧さんや鳥遊さんはどうしますか？」

「私は自分で飛び降りましょう。そのくらいの事は出来ます。…風見様。真に申し訳有りませんが、お嬢様を宜しくお願い致します。」

「分かりました。なら古手鞠さんは、俺を下敷きにして飛んで下さい。」

その言葉に当然ながら、慧は困惑する。

人を下敷きに飛び降りるなど全く考えて居なかったからだ。

対する雪華は、まるで何も聞いて居なかったかの様に落ち着いて居た。

雪華は、そんな事位簡単に出来ると知って居たからだ。

困惑の表情を浮かべて居た慧は、二人の至って真面目な表情を見て、決心したらしかった。

「…なら、風見さん。宜しく申し上げます。」

「喜んで、お嬢様。」

「…皆様、橋が見えて来ました。」

鳥遊の言葉に三人は窓の外に視線を移した。

全長一キロにも満たない橋が、直ぐ其処に有った。

工事現場のフェンスを突き破り、70キロまでのマージンを取る為に、リムジンは僅かに加速する。

「後、五秒です。」

橋は建設途中で、中央の部分が僅かに繋がって居ない。なので、飛び降りると同時に、下の河へ落とす事にした。

もしかしたら、ドアを開けた瞬間に爆弾が起爆するかも知れないが、其処は賭けだ。

「後、四秒。」

雪華が狙撃銃を背負い直す。

「後、三秒。」

鳥遊はハンドルを片手に持ち返る。

「後、二秒。」

雪華と慧がドアノブに手を掛ける。

「後、一秒。」

一希は叫ぶ。

「……今だ!!」

慧がドアノブを引くと同時に、一希は背中でドアを押し開け、飛び降りた。

制御を失った筈のリムジンは、事前に稼いだマージンを削って行き、見えなくなつた。

数秒後、激しい爆発音と共に、噴水が上がつた。

「…重い。」

「重くないです!!」
建設途中の橋の上。

一希は慧の下敷きになって居た。

自分が言い出した事とは言え、こつして見ると結構無茶が有つた様に思える。

「すみません、取り敢えず降りて貰えませんか？」

束の間の開放感の後の……

「ぐふっ」

強烈な蹴り。

予想外の事に、一希は思わず本性で叫んだ。

「何しやがる!!」

「重い、って何ですか!?!重いつて!!」

「いや、思わず……」

そう言つた後、慧の表情が変わつたのは、一希の気の所為では無いだろう。

実際、その直後、再び強烈な蹴りが一希を襲つた。

『俺、何か悪い事言っただけ……？』
薄れていく意識の中で、一希はそう自問した。

護衛一日目 ～脱出～ (後書き)

コメント等、お待ちして降ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7675y/>

白紙の地図と高校生のPGC ~ half red eyes ~

2011年12月11日10時49分発行